

分野番号 1 小学校 学習指導の部

社会にかかわる力を育てる小学校社会科学習を目指して
～地域の「ひと・もの・こと」を大切にした学習材の開発・実践を通して～

葛城市立新庄小学校 教諭 仲川 道興

1 実践内容

小学校社会科の究極の目標は、公民的資質の基礎を培うことにある。そのことに加え、現行学習指導要領からは、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことが明示された。



昭和61年に奈良県小学校教科等研究会社会科部会専門委員となって以来、上述主題のもと、「社会への参画力」の基礎を児童に身に付けさせるべく研究実践を行ってきた。地域の教育力活用や地域社会への積極的なかわりとともに、地域の「よさ」の発信に取り組んだ実践を以下に略述する。

(1) 歴史学習や郷土学習における博学連携について(3年、6年)

小・中・高の各学習指導要領において、博学連携や郷土の伝統文化に対する教育の必要性が強調されているが、学校の博物館活用は停滞している。

平成12年11月の葛城市歴史博物館開館当初（開館当初の名称は新庄町歴史民俗資料館）より、市内小中学校教職員の代表として博物館協議会委員を委嘱され、小中学校の博物館活用を啓発・推進する役割を担うことになった。同館の魅力や活用の大切さを市内教職員に伝えるとともに、博物館活用をはじめとする博学連携について、以下の実践に取り組んだ。



- 3年 葛城市歴史博物館学芸員の出前講話 「葛城市のすてき」(総合的な学習の時間)
同館の見学 「昔の暮らし」 (社会科)
- 6年 同館学芸員による出前授業 「土器をつくろう」 (図画工作科)
同館の見学 「古代の葛城市」 (社会科)
同館学芸員との「協働」授業 布施城と「ほらがとうげ洞ヶ峠じゅんけいの順慶」 (社会科)

※葛城市中学校郷土読本「布施城」(仲川執筆)より抜粋

① つついじゅんけい筒井順慶ろうじょうとともにろうじょう籠城戦に耐え抜く

奈良県においても、戦国時代は戦いの連続でした。奈良の戦国武将の代表格が、筒井順慶と松永久秀です。布施氏は、順慶方の有力武士として戦いに明け暮れました。

織田信長の援助を得た久秀との戦いに苦戦を強いられた順慶は、最後の砦として布施城での籠城戦に挑み、1565年ごろから数年にわたりその強固な守りで耐え抜きました。

ふもとの布施郷は総勢10,000人以上の松永・織田連合軍により、1568年に焼き払われましたが、布施城は一度も落城することはありませんでした。

(2) 地域素材を取り上げた産業学習材の開発について(3年、5年)

社会科の授業設計において、身近な地域素材の学習材化が児童の学習の深化・充実にとって大切である。3年では、地域の産業に対する理解とともに、郷土に対する誇りをもたせることを意識した。5年では、その産業に携わる「人」の営みに焦点を当て、キャリア教育の視点も踏まえるとともに、「地域発」の産業学習として全国の特徴的な事例(北海道別海町の酪農)へとつなぐように工夫した。以下に示す5年の実践事例は、平成17年度全国小学校社会科研究協議会研究大会奈良大会において研究発表を行ったものである。

3年 地域で作り出すもの 「日本一!葛城の二りんぎくづくり」

「奈良県で最初!葛城のらくのう」

5年 我が国の農業 「地域の人たちが支える葛城の酪農・日本の酪農」

(3) 地域を取り上げた教育放送番組やマルチメディア教材の制作にかかわって

小学校3、4年の社会科学習を中心に、奈良県教育委員会が制作する以下の番組等の制作に携わった。葛城市の事例を地域の学習材として取り上げることで、郷土への誇りとともに児童の学習意欲の向上にも役立った。

3年・社会科学教育放送番組「てくてく歩いて地図づくり」

・なら教育番組(学校へようこそ)

「話す・聞く・書く・読む」～確かな学力を～

4年・社会科学教育放送番組「あたたかい土地のくらし」

・小学校社会科マルチメディア教材

「山ろくを生かす葛城市」「山にかこまれた野迫川村」



2 成果及び課題

(1) 地域素材の学習材化によって、児童の地域理解や学習の深化、追究意欲の向上に非常に効果があった。地域の生産活動に携わる人々の郷土を愛する姿や、懸命に仕事に打ち込む姿にもふれることができ、地域の社会的事象に対する共感的な態度も育むことができた。

(2) 現在、前述の奈良県小学校教科等研究会社会科部会事務局長として、本県の社会科教育に携わっている。「社会科＝覚えるだけの教科」としてのイメージを払拭し、「社会にかかわることの楽しさ、大切さ」をより多くの先生方に伝えるべく、今後も様々な機会を通して社会科の魅力を発信し続けていきたい。

3 その他参考になる事項

奈良県立教育研究所ホームページより教育番組「学校へようこそ」

<http://www.nps.ed.jp/nara-c/multi/bangumi/>

奈良県立教育研究所ホームページより小学校マルチメディア教材「奈良県のくらし」

<http://www.nps.ed.jp/nara-c/multi/kyouzai/>

葛城市ホームページより「葛城市歴史博物館」

<http://www.city.katsuragi.nara.jp/>

葛城市中学校郷土読本「郷土葛城を訪ねる」 平成24年3月 葛城市教育委員会

1 実践内容

(1) はじめに

あいさつとは、人間同士のコミュニケーションにおける基本である。しかし、「元気のいいあいさつをしよう」とか「笑顔であいさつしよう」などと児童に話すだけでは、あいさつの大切さはなかなか伝わらない。基本的な生活習慣は、私たちの態度や行動の基本となるもので、その基盤は家庭生活の中で養われるものである。したがって、あいさつや身だしなみ、言葉遣いなどの礼儀作法については学校生活の中だけでなく、家庭と連携して身に付けることが大切である。



「あいさつ」の「あい」は心を開いて相手に言葉を投げかけること。そして、「さつ」は心を開いて受け入れ、相手に言葉を返すことである。登校の途中で出会った友人とあいさつを交わすことによってお互いがいい気分になったり、「今日もがんばるぞ」とやる気がわいたりしてくる。声を出すのは、自分に対して気合を入れる、元気や勇気を出すなど、自分を動かすためである。そしてもう一つの意味が、周りの人に元気を与える、雰囲気盛り上げるといふ、自分以外の人を動かすということである。小学校の早い段階から家庭でのあいさつの励行を心がけるとともに、学校においてもあらゆる教育活動の中であいさつの大切さについて理解させ、実践力を養うことが必要である。

(2) 本校の登校の様子

本校では毎朝、各分団で集まって分団登校をしてくる。校区が広いので、どうしても登校中に、分団の列が長くなってしまふ。また、歩くスピードも学年によって違うので、分団内のトラブルも多い。そのようなトラブルに対応して、休み時間に分団毎に集めたり、個々に呼び出したりといった指導を行っている。しかし、これらの指導は児童の行為に対する後追い指導となることが多い。行為の後追い指導だけでは、こういったトラブルはなくなることはなく、繰り返されることとなる。児童一人一人の日々の様子を把握し、適切な指導を行っていくことによって、児童の気持ちに寄り添ったよりよい指導になると考える。そこで、期間限定で行われていた校門でのあいさつ運動を常時行うことで、児童の様子を把握する一つの手立てとしていった。



(3) あいさつ運動

朝夕、校門で登下校指導をしていると、子どもたちの様子の変化を把握することができる。例えば、日ごろ元気な子どもが肩を落として登校してくると、何かあったのかなと声をかけることができる。また、元気に登校してきたはずの子どもが、元気なく下校していくと、学校で何かトラブルでもあったのかと、担任と話をすることもできる。このように、日ごろの些細な変化を見逃さないことで、児童理解を一層深めることができる。また、子どもたちは自らの悩みを訴え、相談することもできるようになり、教員との信頼関係も生まれてくる。

こうした日常的な児童との交流が問題を未然に防ぐとともに、問題が発生した場合には適切な対応をとることができるようになる。また、問題によっては、養護教諭やスクールカウンセラーなどの協力を仰ぐこともできる。

2 成果及び課題

校門での登下校指導を行うことで、子どもたちからのあいさつが増えてきた。子どもたちの笑顔も増え、担当学年だけでなく、全校児童の顔も覚え、話しかけてくる児童が増えてきた。また、気持ちのよいあいさつができていた児童に対して、「大きな声で気持ちいいあいさつだね」「先生も元気になるよ」など声をかけることで、その周りの児童のあいさつが変わってきた。叱るのではなく、本校



のスローガンの一つである「いいとこ、みつけ」、褒める、認めることを通じて児童が変容していく姿がみられる。しかし、中にはまだまだ恥ずかしがって声を出してあいさつができない児童もいる。そのような児童に対しては、教員から声をかけ続けていくことを大切にしていきたい。

登下校中や学校でのトラブルを少なくしていくためには、あいさつを定着させていくことが何より大切であると考えている。あいさつが習慣化するまでには多くの時間を要するが、決してあきらめず、粘り強く指導を続けることが重要であることを改めて感じている。

今年からは、本校が取り組んでいる学校コミュニティをより充実させ、地域の方々の参画をいただき、ともに協働してあいさつ運動を行っている。

登下校指導を継続して行い、保護者や地域の方々と顔を合わせたり、地区懇談会で意見を交換したりして、いただいた情報を全職員で共通理解しなければならないと感じている。地域や家庭とのつながりを大切にする中で「地域住民の声を大切にする学校」・「地域に拓かれた学校」にしていきたい。地域に愛される児童、そして、児童が安心して生活できる地域であるようにしていくことが大切である。

1 実践内容

ここ数年の体力テストの結果から、本校の児童は全国や県平均に比べ体力が低い傾向にあることが見えてきた。また、運動する児童とそうでない児童の、運動の機会や体力の差が顕著であることも分かった。

そこで、私は研究主任として研究主題を『かかわろう、つながろう、ともに生きよう』、副題を「なかまとのかかわりを大切にした体育学習を通して」と定め、体育科の指導方法や授業内容の工夫とともに、体育的活動の充実を図り、児童の体力の向上を目指して学校全体の研究を進めた。



(1) 研究組織

本研究を進めるに当たっては、研修部と体育部、保健部が連携しながら取組を進めた。

(2) 研究内容

- ・授業研究を中心とした実践研究
- ・指導体制に合わせた個に応じた指導法の研究
- ・学年間のつながりを意識した年間指導計画の見直し
- ・業前活動や全校体育活動等の教育活動の充実

① 研修部

低学年・中学年・高学年に分かれ、子ども同士のかかわりを重視した授業の研究を中心に取組を進め、研究授業を行ってきた。また、教科の学習教材・教具の工夫、学習指導計画の検討などを行った。夏期休業中には奈良県体力向上推進コーディネーターや講師を招き、授業の基本的な進め方や、体づくり運動、ボール運動等の具体的な指導についての研修を企画した。

② 体育部

全校での体育的活動（かけ足、縄跳び）の工夫と充実に努めた。二学期のかけ足の最後に行うマラソン大会では、近隣にある奈良産業大学と連携し、信貴山グラウンドを使用させてもらった。400mトラックで低・中・高学年に分かれ、それぞれ10分・20分・30分間走った後、人工芝の上で全校鬼ごっこを行った。

三学期の縄跳び集会では、異学年間のかかわりをつくるために縦割班で行い、



高学年の児童が低学年の児童にアドバイスできる時間を設定した。

③ 保健部

校内の健康安全についての様々な統計をとり、その結果を基にして、児童や家庭への啓発に努めた。

2 成果及び課題

体育科を中心として各学年が公開授業を実施し、授業実践をする中で、体づくり運動や陸上運動、器械運動での個に応じた指導や支援の在り方、更に教材や教具、補助具の工夫などについて研修することができた。その結果、児童がめあてをもって互いにかかわり合い、アドバイスし合いながら学習する姿がみられるようになった。その成果は、平成25年度奈良県小学校体育研究会前期研究大会会場校として、公開授業で披露することができた。今後も継続した教科体育での授業の充実を推進していきたいと考える。

また、作成した補助教具や教材を、体育教材や教具の保管スペースを設け整理することで、他の学年や学習でも活用できるようになった。その教材や教具を有効に活用するためにも、年間指導計画を更に見直し、各学年の指導の時期や場所も工夫していきたい。

体育的活動では、二学期には全校で、かけ足集会、三学期には縄跳び集会の時間を設定し、児童が自己の体力向上に向けて挑戦する機会とすることができた。また、全校縦割活動も推進し、特に縄跳び集会では、縦割班ごとにグループになって跳ぶことで高学年の児童が低学年の児童に教える姿もみられ、縦のつながりも出てきた。



今後、更に体力テストの結果を分析し、本校児童の課題を克服するような運動を、年間を通じて行うことも必要ではないかと考える。また、健康や食に関する内容や生活の仕方などについても、保護者との連携を取りながら、更なる取組も必要であると考える。

1 実践内容

奈良県教育委員会指定研究員に2度指定され、LDプロジェクトチームとして冊子の作成に参加した。また、平成14年に特別支援教育士スーパーバイザーを取得し、発達障害についての研究・実践に研鑽を積んでいる。



(1) 校内支援体制づくり・・・校内委員会

前任校において、特別支援教育部主任、並びに、コーディネーターとして、校内委員会を立ち上げ、特別支援教育の活性化と校内支援体制づくりを行ってきた。また、町内の各校園所の特別支援教育全体の活性化を図るために、町立幼稚園・保育所・2つの小学校・1つの中学校と、教育委員会・保健センター・療育教室・特別支援学校が集まり、2か月に1回の支援連絡会議を立ち上げた。また、町内の支援を要する子どもたちについての情報交換を行いながら、互いの資質の向上、校園所の支援体制の充実に努めた。

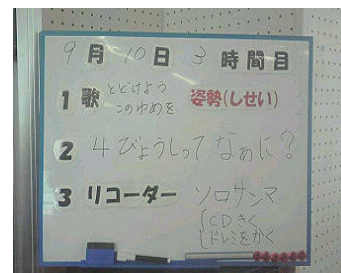
平成24年度に現任校に転任し、管理職の理解と支えを得て、ただちに特別支援教育コーディネーターとして教職員からの教育相談を受け始めた。加えて、“教育相談部会”を開設し、学級を運営する上で日々発生する様々な問題に対して、気軽に相談に応じてきた。また、教務主任と連携しながら、必要に応じて校内支援体制の構築を目指した。

2年目の本年度は、本校の実態に合わせて、生徒指導部・人権推進部・特別支援教育部が合同する「校内支援委員会」を立ちあげ、校内組織としての支援体制の定着を図った。「校内支援委員会」は、1学期には月2回、2学期には月1回程度開催し、継続的に校内支援体制等について検討した。その結果、校内で情報が共有され、支援体制づくりが一定の成果を見せるようになってきた。ここで話し合われた内容については、必ず翌日の職員打ち合わせにて報告し、全体の共通理解を得ている。

(2) 校内研修・教育相談

本校は平均年齢が30歳代前半と大変若い教職員集団であり、個々の教職員を見ると、情熱があり、また、熱心である。しかし、特別支援に関する知識と経験が乏しく、不安を抱え込みやすい者が多いことから、先を見通して系統的にじっくり構えて取り組むことが難しい状況にあった。そこで、随時「コーディネーター通信」を発行して、最新情報の提供に力を入れてきた。また、校内研修を継続的に行うことで、児童理解を深め、個に応じた支援の在り方をともに考えながら取組ができるようになってきた。特に、支援を要する児童は自尊感情が低下しやすいので、人権教育部と連携し、すべての学級で学年開きの際に、奈良県の人権教育教材「なかま」低学年の教材である「かお」に取り組むこととした。学級内・学校内で、日常的に用いられる言葉の「とげ」は、相手の心を傷つけるものであることに気付かせ、あたたかい言葉を使う肯定的な人間関係をつくるために「ふわふわことば・チクチクことば」の考え方を定着させ、言語環境を整えることを通して、支援を要する児童を含むすべての児童の自尊感情を守ることに継続して取り組むこととしている。また、本年度よりユニバーサルデザインの授業づくりに取り組んでいる。見通しがつかないと不安症状を呈する児童がいることに配慮する取組もみられるようになってきた。

その一例として、右の写真のように授業内容を示したものを教室前面に提示することで、子どもたちは1時間の授業の流れが分かり、落ち着いて取り組むことができるようになってきた。その結果、コーディネーターとして、日常的に、教職員の個別の教育相談にも気軽に応じることができるようになってきた。児童の理解の仕方や、支援の仕方等をアドバイスすることで、教職員の様々な負担の軽減に当たっている。また、担任からの要請を受けて、保護者との教育相談にも同席し、保護者や担任の声に耳を傾け、当該児童の実態把握、課題の焦点化、具体的な環境の整え方や支援の仕方等を提案し、継続的に相談しながら取り組んでいる。担任と協力して家庭・学校の信頼関係の構築に力を入れている。



(音楽の授業)

(3) 特別支援学級での支援体制

年々増えつつある在籍児童数や多岐にわたる障害特性に対して、特別支援学級担任はチームとして取り組んでいく必要がある。そこで、毎週担当者会議を開き、各自の課題を持ち寄って絶えず検討会議を開き、支援の在り方と教材研究に当たっている。そして、在籍児童全員の「個別の指導計画」をチームとして作成し、個に応じた支援の充実に当たり、子どもたちの成長を皆で見守るようにしている。今後も互いに情報交換を密にしながらか評価・支援に反映していくよう努めていきたい。

(4) 幼保・小との連携

幼稚園・保育所と小学校との連絡会は、学期に1度、定期的に行われており、情報交換の場となっているが、それに加えてコーディネーターとして夏期休業中に幼稚園・保育所を訪問し、児童観察や職員との情報交換を行うようにしている。幼稚園・保育所に多く足を運ぶことで、保育者の疑問や悩みに対応するように心がけている。幼稚園に対しては、夏期休業中に園内研修として特別支援教育研修、発達障害の理解と支援の在り方についての研修を継続的にもつようになった。今では、年長児クラスはもとより、年中児クラスから継続的に見守ることができるようになってきた。

昨年は本校の特別支援学級入級希望園児の保護者には、必ず学校の授業風景を見学してもらい、教育相談を随時行ってきた。また、本年度は入級はしないが気になる我が子のことについて、小学校側に伝えておきたい、理解を求めたいという思いをもって保護者が入学前に小学校を訪れるようになってきた。入学前から気軽に相談できる雰囲気づくりを行うことで、保護者の不安の解消に努めている。今後も幼・保と協同して小学校へのスムーズな移行支援ができるよう取り組んでいきたい。

2 成果と課題

- ・特別支援教育における支援の手立てを通して、ユニバーサルデザインの授業づくり、校内支援委員会の活性化、教職員へのコンサルテーションは、学校全体の活性化に有効である。
- ・特別支援教育において、特に行動障害についての的確な児童理解が必要である。そのためにはLD・ADHD・自閉症スペクトラム等の発達障害の見極めに加え、第4の発達障害といわれる虐待によるADHD様児童の見極めも必要である。
- ・特別支援教育において、対象児童への教育的アセスメントと具体的な支援の提示と取組は当然であるが、保護者へのカウンセリングによる信頼関係の構築という両輪が必要不可欠になる。

3 その他参考になる事項

大和郡山市立片桐西小学校ホームページ <http://www6.ocn.ne.jp/~katanisi/>

分野番号5 小学校 特別支援教育の部

LD・ADHD等通級指導教室における教室運営と指導について

香芝市立下田小学校 教諭 芳倉 優富子

1 実践内容

平成19年度より、これまでの「障害児教育」から「特別支援教育」が開始された。

通常の学校・学級においても「教育上特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対し、……障害による学習上又は生活上の困難を克服するための教育を行うものとする」（学校教育法第81条第1項）と規定された。



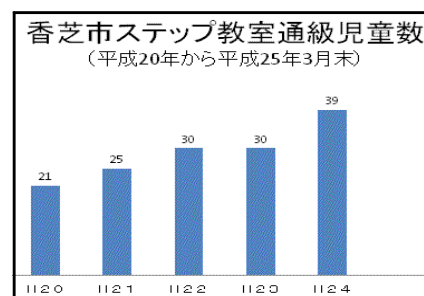
特に学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、高機能自閉症などの「発達障害」に対して教育支援を行うことが求められ、本市においても「ことばの教室」に続き、平成19年度に「LD・ADHD等通級指導教室（通称ステップ教室）」が開室された。平成20年度より本通級担当教員として取り組んできた通級指導教室の運営と指導の一考察を報告する。

(1) 教室の位置付け

本通級指導教室の対象地域は、現在、香芝市全域の小学校（10校）である。通級指導教室への通級に当たっては、就学指導委員会の教育相談を経て通級の可否が決定されているが、教育相談の時期以外は、香芝市就学指導委員会の専門相談員でもある通級指導担当教員が、教育委員会の承認の下、決定している。

本通級児童の障害種別は、自閉症スペクトラムが最も多く、次いで学習障害、ADHDである。自閉症スペクトラムやADHDの児童は、その特性から読み書きの弱さを併せもつ児童もいるため社会性スキルの指導、生活支援とともに読み書き、学習支援が主な指導内容となることが多い。

本通級児童数は、右の表にもあるように平成19年度13名から平成24年度39名と増加傾向にある。



(2) 指導の実際

本通級指導教室では、指導内容や支援方法を決定する際、心理・発達アセスメントを行い、認知特性の把握をする。さらに、児童に必要な検査や評価を行い、個々の児童のニーズを決定し、それに合わせた指導を工夫している。個々の児童がもっている困難さの軽減を図り、在籍学校生活や学習活動に楽しく参加できるようになることを目指している。

① ソーシャルスキルトレーニング（SST）

- ・対人関係や場面理解等に困難さをもつ児童を対象に、低中高学年別で対人関係に必要な具体的スキルを学習し、般化を目的としたグループ指導を行う。
- ・学年を越えた集団のスキルの般化場面として「夏遊び大会」「クリスマス会」「ステップ卒業式」等の企画運営を児童中心で行う。

② 読み書き困難への指導（学習支援）

- ・認知特性に合わせた文字指導を行う（教材や覚え方の工夫・iPadの活用）。
- ・認知特性に合わせた学習スタイルを提案し、児童自身が自分に合った学習スタイルを身に付けられるように指導し、支援する。
- ・読み書きの困難な児童に対してD A I S Y教科書やD A I S Y図書を活用する。

③ 学習の補充

- ・担任と連携をとりながら予習や復習、宿題の質や量の調節などの提案をし、在籍学級での学習活動において達成感をもてるように支援する。

(3) 教育相談とコンサルテーション

- ・担任との懇談（通級担任者会・担任個別懇談）や個別の指導計画の作成を行う。
- ・ペアレントトレーニング（保護者グループで実施）で親子の関係改善を図る。

2 成果及び課題

児童個々の特性等に起因する課題に対して、在籍学級担任や関係機関等と連携をもち、指導を行ってきた。在籍学級での行動の改善や読み書きの向上、自尊感情の向上等の成果が現れている児童も多い。しかし、児童がもつ特性の重複等によって、指導が長期化する児童もあり、指導する児童数の限界、指導内容や方法の再考など課題も多い。

昨年度行った本通級保護者アンケートで、保護者は、「通級で指導を受けてとてもよかった」「我が子を理解できるようになり、子どもへのかかわり方が変わり、子どもも安定した」等々と回答している。様々な困難を軽減していくためには、指導とともに保護者の理解が大切であり、それらの相互作用で児童が苦手さをもちながらも、安定した学校生活や家庭生活を送ることができるのである。

本通級指導教室での指導を受け、児童が「こんなことを教えてくれるとこ、あったんや」「もっと早く教えてほしかった」などと自分の苦手さを認めながらも、前向きに学校生活や学習に取り組むようになっていくことが、指導者としての最大の喜びである。

また、卒業生が二次的な困難さをもたずに高等教育を受け始めている。将来、社会においてよりよい生活を送っていくために、発達障害児の児童期に育てておくべき力がどのようなものであるかを、児童や保護者とともに考えていきたい。そして、より質の高い通級指導教室の運営や効果の高い指導方法の追求のために、更に専門性の向上に努めたい。

3 その他参考となる事項

- ・D A I S Y教科書・D A I S Y図書とは、印刷物の読みに困難をもつ児童生徒などが教科書や図書を読むための支援ツール。

【問い合わせ】日本障害者リハビリテーション協会 情報センター D A I S Y担当宛
TEL : 03-5273-0796 FAX : 03-5273-0615 E-Mail : daisy_c@dinf.ne.jp

- ・参考図書 「ペアレント・トレーニングガイドブック」活用のポイントと実践例
岩坂英巳編著（奈良教育大学特別支援教育研究センター）

分野番号 6 小学校 学校教育目標の具体化の部

「地域とともにある学校づくり」～二上コミュニティの取組～について

香芝市立二上小学校 教諭 浅井 信成

1 実践内容

本校は、平成24年度に県教育委員会より地域教育力の推進のためのモデル校に指定されたこともあり、学校を核とした地域コミュニティ（以下「二上コミュニティ」という）の再構成を図る取組を始めた。これまで、学校と保護者・地域住民が様々な事業を通じて培ってきた「連携」という関係を発展させ、保護者や地域住民が学校運営に「協働・参画」して、学校や地域の課題解決に向けた仕組みづくりを構築する取組をスタートさせた。まず、学校の組織である校務分掌の見直しを図り、校務分掌の中にコミュニティ推進委員会を立ち上げ、地域と学校を繋ぐ中心的な役割を担う推進役として教職員からコーディネーターを配置した。次に、これまでの取組を点検し、学校と家庭・地域がコラボレーションする「協働」によって教育を「共創」する（ともに創り出す）ことで、停滞あるいはマンネリ化していた取組を活性化させることを考えた。その上で、農園での生産活動、挨拶運動、食育推進、読書活動、運動会の改革、安心安全運動といった内容を基にして、教職員、保護者、地域住民等の「参画・協働」による「二上（ふたかみ）コミュニティ」を立ち上げた。



(1) 二上コミュニティ推進委員会の構成員

地域の自治会長、老人会の役員、育友会役員、地域住民、市教育委員会関係者、県教育委員会関係者、学校職員

(2) コミュニティ推進委員会各部会編成

本校の子どもの実態かつ奈良県教育の課題を踏まえ、3つのプロジェクトと6つの部会で取組を行う（平成25年度）。

- ① 学力向上プロジェクト…基礎学力向上部会、読書活動部会
- ② 生活力向上プロジェクト…生活安全部会、勤労生産部会
- ③ 健康力向上プロジェクト…体力向上部会、食育健康部会

(3) 特徴的な活動内容（平成24年度の取組より）

① 運動会の実施方法

本校では、近年、急激な児童数（現在807名）の増加があるものの、運動場は狭く、また観覧マナーも含め、運動会の安全な実施そのものが難しい状況となり、その在り方が大きな懸案事項となっていた。学校行事とはいえ、その性格上、学校だけでは容易に変更できにくく苦慮していたところ、「二上コミュニティ」で熟議いただくことができた。運動会での保護者や地域の方の観覧方法やマナーの在り方について、一定の方向が示され、保護者に周知した。実施前は反対意見等もあったが、運動会当日の観覧は育友会役員の全員の協力の下、立ち見席及び入れ替え制にて実施し、実施後のアンケートでは、概ね好評であり、中には「もっと早くから取り組んでもよかった」という意見もいただけた。



② 食育推進

オープンスクールを利用し、食育に関する講演会を開催し、児童とともに保護者の方々に食育について考えていただく機会を設定した。また、学校（給食）と家庭（朝・夕の食事）が連携して取り組める内容を考え、食事のマナーでの課題を検討し、「①姿勢を正して食べる ②食器に手を添える ③残さず食べる」の3点を重点に『チャレンジ食事マナー週間』の取組を行った。

③ 安心・安全運動

校区の子どもたちにかかわる安心・安全について意見交流を行い、児童が下校する様子や危険箇所等の現地確認を数回行った。その状況を基にして「子ども見守り・声かけ活動」冊子の作成と安心安全ボランティアの募集を含めた見守り活動の体制づくりを検討、実施した。

④ 堆肥作り

長年の勤労生産学習の一環として、地域の方の畑をお借りして進めてきた「農園活動」について話し合いを行ったところ、老人会の方より野菜の栽培だけでなく、その基となる土づくりの重要性が提案され、「二上農園」に堆肥を作る場所を設置するとともに、その意義を子どもたちにも講話いただいた。現在、堆肥づくりを実施している。

⑤ 読書活動

図書ボランティアを中心とした読み聞かせや読書環境の整備の検討、読書を活性化していくための取組（読書貯金、手作りしおりのプレゼント等）を企画、実施した。

⑥ 挨拶運動

「挨拶がこだまする学校・家庭・地域づくり」を目指し、登下校時の地域の方や保護者のかかわり方について協議した。また、意識向上のために、児童から挨拶に関する川柳を募集し、その活用（掲示板、ポスター、たすき表示等の作成）について検討、実施した。

このように学校と家庭・地域がともに当事者意識をもって知恵を出し合い、三者が互いに働きかけて、子どもの課題や目指す子ども像を学校を含めた地域で共通認識し、子どもたちの豊かな育ちを確保していけるよう、更に実践を積み重ねたい。

「子ども見守り・声かけ活動」 ポイント&対応マニュアル

- 連絡体制と対応マニュアル
- 通学路における見守り・声かけ活動
- 「子ども110番の家」対応マニュアル
- 地域別安全マップ（写真）
- 110番通報内容チェック表及び連絡先

保存版



平成25年度（H25.4.8版）
二上コミュニティ生活安全部
二上幼稚園・小学校教育友会編

氏名

2 成果及び課題

(1) 成果

- ① 教職員と保護者や地域の方とのコミュニケーションが広がり、また、地域の方も子どもたちへの意識が高まり、積極的に学校に足を運んでもらえる機会が増えた。
- ② 保護者や地域の方とともに熟議することで、教職員自ら地域を知り、地域に働きかけ、地域を生かした教育推進への意識が高まった。

(2) 課題

学校だより、学校HP、懇談会等で学校や子どもの課題や、教育方針等を積極的に提供することに努めたが、更にこの取組の意義や目的を伝え広げていく努力が必要である。

3 その他参考となる事項

情報提供のためのホームページアドレス http://www.city.kashiba.lg.jp/nijou_s

1 実践内容

(1) はじめに

本校は金剛山の麓にある学校で広い校区を含むが、大半の子どもたちが北宇智保育所から入学してくる。ここ数年、入学後の保育所等との段差に戸惑う子がいたり、保育所からの人間関係をひきずったトラブルが起こったりするたびに、保育所との連携が必要なのではないかと感じてきた。



(2) 保育所との連携の実際

「子どもも大人も楽しみたい」「保育所と小学校、互いを大好きになりたい」、そんな気持ちで取組に臨んだ。そこで、これまでも取り組んできたカリキュラムの範囲内で共有できることを模索した。さらには、保育所の子どもたちが適度な段差で入学できるように、また、小学校の子どもたちはちょっと「大きい子」「小学生」としての自覚とプライドから自尊感情を高められるようにという願いを大切にしながら取組を進めた。

5月 がっこうのまわりたんけん（1年生→保育所）

6月 保育所のお散歩（年長組→小学校）
小学校授業参観（保育士→小学校）

7月 夏祭りにご招待（年長組→小学校）
おかえり1年生（1年生→保育所）

8月 保育所参観、
保・小職員合同研修（保育所）

9月 小学校運動会（年長組→小学校）

10月 保育所運動会（小学校→保育所）
柿狩り（年長組→小学校）

11月 世界の遊び大会（年長組→小学校）

2月 読み聞かせと豆まき（運営委員→保育所）

折り紙ブロックを使って（年長組→小学校）



1年生が保育所の子どもたちを迎える場面では、「どうやったら保育所の子が分かってくれるかな?」「保育所の子に楽しんでもらうにはどうしたらいいのかな?」と相手意識をもった活動を展開することができた。1年生は自分たちで楽しむよりも「楽しませる」ことを意識し、高いモチベーションと丁寧さで取り組むことができた。

また、職員同士が交流することで、小学校の教員だけでは気付けない様々な示唆を得ることができた。保育所でできることが、小学校では「できない」として扱われてしまっていたり、小学校の活動を見越した保育所での取組が行われていなかったりと、連携することで大きな成果をあげられるであろう視点がみつかった。

(3) スタートカリキュラム

もう一つの大きな取組として、入学後の段差を低くし、よりスムーズに移行できるように、保育所の先生方と相談しながらカリキュラムを作成した。現行の教科書の内容を、連携とコミュニケーションのプログラムで組み立て直し、スタートカリキュラムを作成した。また、最初の1か月の授業の展開を週案としてまとめた。

児童数の減少に伴い、五條市内の小学校ではほとんどが単学級となっている。そうになると、その学校で1年生を担当したことがある先生が誰もいなかったり、経験のないまま一人で1年生を担当することになったりというケースが増えている。そうした時に、保育所での子どもの様子を知っていることや、どんなところに配慮したら子どもたちがスムーズに小学校生活のスタートを切れるかということをあらかじめ分かっていたら、入学時の段差を大きなストレスなく、成長の糧にできるに違いない。その手がかかりとなるように取り組んでいる。

2 成果と課題

昨年度、保・小連携を進めて、二つの成果があった。

一つ目は、保・小の連携が軌道に乗ったことである。無理をしない範囲で計画的に実施し、その中で、「保育所と小学校を互いに大好きになりたい」というコンセプトを達成することができた。また、教師と保育士にも太いパイプができた。

二つ目は、保育所の先生と相談しながら、独自のスタートカリキュラム、アプローチカリキュラムを完成することができた。これによって、入学後の段差を低くし、よりスムーズに移行できる手がかかりができた。

教育の現場はチームの力が求められる。今後の課題として、多くの視点から子どもたちを観察できるようなネットワークづくりを進めていかなければならない。校内ではもちろんだが、保・小の連携に取り組んで、保育所と小学校の職員が交流することで新たな視点やより大きなバックアップの体制ができることが分かった。今後も、職員の太いパイプを、子どもを取り巻く教育環境に大きなプラスにしていきたい。



1 実践内容

(1) 音楽専科としての取組について

音楽への興味・関心を深めるため、曲に合わせて足を踏み鳴らし、拍子に合わせて体を動かす「ストンプ」などでリズム感を育成することに取り組んできた。さらに、言葉が不自由な人とも「伝え合う」ことができる手話を取り入れた「あいさつの歌」など、積極的に体を使った活動に取り組むことで、リズム感や拍を意識できるようになってきた。その成果の一部を、本校を会場として行われた平成24年度奈良県小学校音楽教育研究会前期研究大会で、第3学年の公開授業として発表することができた。また、4年生以上の希望者を募り、約20名あまりの児童が金管バンド（メロディーキッズ）の練習に週3回取り組んでいる。保育所や地域の行事に積極的に参加し、一生懸命演奏している姿を見たり聴いたりしてもらうことで、多くの人に感動を与え拍手や笑顔をもたらしている。これが児童の自信と更なる意欲につながっている。



(2) 教務主任・研究主任としての取組

① 研究主任として

本校では「未来につなげよう！宇智っ子の夢、心豊かで自ら学ぶ児童の育成」を学校教育目標に教育活動を行っている。昨年度の総括から、「思ったことを発表し失敗しても大丈夫という場をつくること」などの課題が出された。そこで、「伝え合う力」を高めるため、副題として「国語科を核としてコミュニケーション能力を育てる」を設定し、研究主任として校内研修の計画と推進に努めている。全学年が国語科の公開授業に取り組むことができ、大学教授の指導の下、教員の指導力が高まり、児童のコミュニケーション能力が高まりつつある。

② 特別支援学級を含む時間割の編成について

特別支援学級の児童や低学力、気になる子の支援に配慮し、教育目標に沿うように時間割を作成した。本校では、きめ細かな指導で一人一人が基礎・基本の確実な定着を図ることができるように、TT学習指導及び少人数指導を実施している。学級の様子や児童の実態について適宜打ち合わせの機会をもつことは当然であるが、児童の様子に合わせて臨機応変に対応できる指導体制もとっている。

③ 職員の研修体制について

教員の世代格差が広がっている現状に対応して、経験が浅い教員とベテラン教員をつなぐ研修のために講師を招聘し、研修を実施した。児童の行動観察や指導のポイント、Q Uを生かした学級づくりなど、人権教育推進教員と協力しながら研修を計画し、取り組んだ。また、特別支援教育においては、通常学級における気になる子について、講師を招聘し個に応じたかかわり方について研修を深めた。

2 研修から実践へ

(1) 学校の現状把握

学校力・教師力・人間力の3つの面から現在の本校の姿を捉え、分析する姿勢に立ち、主体的に取り組む。

(2) 改革への方向性

① 学校力の向上

- ・組織としての学校力を高めるために、校務分掌間を整理し、一人一人の職員がやりがいをもって活用できるように努める。
- ・教員の世代格差が広がっている現状に対応して、経験が浅い教員とベテラン教員をつなぐために講師を招聘し、研修を実施する。
- ・教員の特質を生かした校務分掌。次年度に向けた継続的な取組と新しい取組について企画立案する。

② 教師力の向上

- ・大学教授の指導の下、全学年が国語科の公開授業に取り組むことで教員の指導力を高める。
- ・授業のユニバーサルデザイン化に取り組むことで個に応じた授業を目指す。
- ・各教科の言語活動を活用して学んだことを、道徳・特別活動・総合的な学習の時間などで生かす場づくりをする。

③ 人間力の向上

- ・児童の行動・学習の成果や課題に対する動機付けをすることで、自尊心を高め、主体性を高める。
- ・児童についての共通理解を深めたり、授業の技を交流したりするために、沙龙的な集まりを継続する。

3 成果及び課題

本校は、全児童数200名に満たない小規模な単学級の小学校である。1年から6年までのすべての音楽科の授業を担当するとともに、教務主任を担当することで児童への指導力と組織での調整力の2つの力を伸ばすことができた。今後の課題について、次のように捉えている。

- ・学校の教育目標を達成するための取組について、管理職・担当部署と協議を重ねる。
- ・ミドルリーダーとなっている教員と協力しながら組織運営を図る。
- ・地域の教育力を学校教育力に生かすために、スクールボランティアの積極的な活用を企画し、実施する。
- ・PTA役員・学級委員と連携し、担任がスムーズな学級経営をしやすいようにサポートする。
- ・教師力の向上を目指した校内研修を企画し、実施する。

今後ともこの経験を学校運営の場に生かしていきたい。

4 その他参考となる事項

宇智小学校ホームページ <http://www.gojo-nar.ed.jp/uchisho/>